

中学生母子間の時間的展望の差異と 子ども自身の時間的展望に関する検討

宇野 あかり・米田 佑
東北大学大学院教育学研究科

要旨

本研究の目的は、中学生とその母親の時間的展望に着目し、母子間の時間的展望の状態の差異が、子どもの時間的展望にどのように関連しているのかを探索的に検討することである。A 市内の中学 1～3 年生とその母親に質問紙調査を行い、ペアとして揃った 41 組の母子(男子 12 名, 女子 29 名)を分析対象とした。質問紙は①フェイスシート: 性別・年齢・父親と母親の最終学歴・世帯所得, ②時間的展望体験尺度(白井, 1994, 1997)を用いた。分析の結果, 時間的展望の「目標指向性」において, 母子間の得点差と子どもの得点との間に相関が見られ, 母子間での差異が小さいほど, 中学生の得点が高くなることが示唆された。母親と子どもの将来展望の差異が小さい場合, 母子間の将来に対する意見が一致しやすいことから子ども自身の葛藤が少なく, 自身の将来を考える環境が整えられやすいことによって将来への意識を持ちやすくなると考えられる。

キーワード: 中学生, 母親, 時間的展望

I. 問題と目的

1. 時間的展望とは

我々は日常生活の中で, 目の前に存在している現在の生活に取り組みながらも, 時には自身の過去や未来へと意識を及ばせながら暮らしている。そして, 過去や未来への意識を受けて, 現在に対する自身のとらえ方を変化させることもある。心理学ではこのように, 自身の過去・現在・未来に対するとらえ方を示す概念として時間的展望というものがある。

Lewin(1951)によると, 心理的な時間のとらえ方を時間的展望と呼び「ある一定の時点における個人の心理的過去, 現在および未来についての見解の総体」と定義している。時間的展望は人の行動に対して最も影響力を残し続けるもののひとつであることも強調されており(Zimbardo 2012), どのような時間的展望を形成していくかは, 我々がどのような人生を送るのかといった問題と密接に関係する問題といえるだろう。

時間的展望の発達とは, 認知的な発達を基盤に進むとされる。白井(1985)は小学生・中学生・高校生を対象に, 児童期から青年期にかけての未来展望の発達に関する調査を行った。その結果, 児童期は現在とよりはなされた未来展望を有している一方で, 青年期はより現在と結びついた未来展望を有しており, さらに発達水準が進むにつれて, その視野の拡がりがみられた。これは小学校 4 年生から中学校 2 年生を対象に調査を行った都築(2008)

でも同様の結果が得られている。Erikson(1959, 1982)が、青年期の心理社会的発達危機である「自我同一性 対 自我同一性拡散」の構成要素として「時間的展望の獲得 対 拡散」の存在を示していることから、時間的展望の発達は特に青年期が重要であることがわかる。

ところで、どのような時間的展望を有していることが望ましいとされるのだろうか。これまで様々な知見が積み重ねられているが、そのうちの勝俣(1995)が提唱している適応的な時間的展望モデルとは、①時間の流れの中で、過去展望、現在展望、及び未来展望が適度に区分されながら統合されており(一貫性)②過去展望においてはポジティブフィードバック(ネガティブな経験や状態から何かを学び取り、ポジティブに認知すること)がなされ、現在展望を媒介にして未来に対するポジティブフィードフォワード(目標の設定、期待、希望などのポジティブな未来予測)がなされるとともに、常にその連鎖が継続されている状態、とされている。このモデルに沿った研究に、大石ら(2009)の適応的な時間的展望とレジリエンスの関連をみたものがある。この研究では適応的な時間的展望を白井(1994, 1997)の時間的展望体験尺度の得点が高いものと想定し、レジリエンスとの関連をみている。本研究においても、大石ら(2009)の解釈に倣い、適応的な時間的展望の定義を「時間的展望体験尺度の得点が高いもの」とする。

2. 親子間の時間的展望の関連

青年期前期にあたる中学生は、時間的展望が大きく変化する時期であり、進路選択の必要性などが出てくることから、特に自身の将来に対して現実的かつ具体的な見通しを持つようになる(白井, 1997)。そのような状況下で、Nurmi(1991)によると、青年期の子どもが将来展望を形成する上で、親が重要な存在であるという。

子どもの将来展望や目標の形成に与える親側の要因としては、親の養育態度や親子関係などが取り上げられ(遠山, 2006)、その中でも検討されることが多い要因の一つとして、親の子どもに対する「期待」が挙げられる。ここで、杉山・神田(1994)と杉山(1995)は時間的展望の未来展望の確立においては、自己に対する「期待(expectancy)」が中心的な役割を持つと指摘し、その理論に基づいて実施された杉山・神田(1996)の調査結果からも、自己に対する「期待」に関わる認知的概念である一般的統制感に基づいて、未来展望が確立されているという経路が示唆された。したがって、「期待」と時間的展望の、特に将来に対する意識には密接な結びつきがあると考えられる。

期待研究領域においては、親の期待と子どもの能力やパフォーマンス、また目標などにズレがある場合、子どもの心理的側面に何らかの影響を及ぼすといった、親子間の一致不一致が検討されることも多く、ズレが大きくなるほど子どもの精神的健康に負の影響を与えることも多数報告されている(Wang & Heppner, 2002; 赤星, 2007)。また、遠山(1999)の調査では、親子関係や親の期待と子どもの目標の関連を検討し、中学生は親子関係が良

い場合、良くない場合よりも子どもの目標は親の期待に影響を受けていることなどが明らかになっている。このことから、子ども自身の将来に対する意識と親側の子どもに対する期待の関連は強いものだと言えるだろう。しかし、親の子供に対する期待の中身に目を向けてみると、例えば「(親自身が子どもからの経済的援助を受けたいから)将来子どもが収入の良い職業に就いてほしい」、「(孫の世話という人生の新たなやりがいを見つけないから)子どもの結婚・出産を望む」等、自分自身の将来計画や目標とも密接に関連しているものも多いことが予測される。よって、期待と未来展望は単純に切り離すことができないものと考えられる。これらのことを踏まえると、抱く対象が子どもに限定される「期待」に代わるものとして、親自身の人生に対するとらえ方を踏まえている「時間的展望」の視点から親子の双方を対象として検討することで、より包括的に親子間の相互作用を理解できると考えられる。そして、期待研究領域で親子間の一致不一致が検討されてきたように、親と子の時間的展望の差異に焦点をあて、その関連を検討することには意義があるといえるだろう。

親子間の時間的展望の関連をみた先行研究は限られているが、青年期後期の子どものいる家族間の時間的展望を見た白井(2004)の調査では、夫婦間での関連は見られたものの、大学生の子どもとその親との間の関連は見られなかったが、青年期後期では重要な他者が親から仲間へ移行したことが、その背景にあると指摘されている。親子関係は子どもの発達に伴って変化するものであり、青年期前期にある中学生は、重要な他者が親から仲間へ変化する過渡期にあるものの(Blos, 1962; 渡辺, 1989)、青年期後期と比較すると未だ親から受ける影響も大きいと考えられる。したがって、白井(2004)が述べるように、中学生の親子においては時間的展望の持ち方は、これまでの生活史のなかで親のしつけや親のモデリングをとおして学習するため似てくることが推測される。これらの知見も踏まえた上で、中学生の親子間の時間的展望の一致不一致を見ていくこととする。

3. 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究の目的は次の通りである。中学生とその母親の時間的展望に着目し、過去・現在・未来に対する意識の母子間の差異の状態が、子どもの時間的展望にどのような関連しているのかを探索的に検討する。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

A 市内の私立中学校の 1～3 年生の生徒とその母親に質問紙調査を行った。最終的な回収サンプル数は、中学生 81 名、保護者で 51 名であった。そのうち有効回答で、かつ親子ペアとして揃った 41 組の母子(男子 12 名、女子 29 名)を分析対象とした。

2. 手続き

中学生に対しては担任教師を通して実施してもらった。また、中学生の母親に対しては返送用封筒と合わせて生徒を通して配布し、返送された質問紙のうち有効回答であるものを分析に用いた。回答に要する時間は約10～15分であった。なお、返送のあった保護者に対しては、後日500円分のQUOカードを謝礼として郵送した。調査の実施時期は2019年9月中旬から10月上旬であった。また、倫理的配慮として、質問紙の表紙部分において、アンケートは匿名であり、回答は自由意志であること、個人の結果は明らかにされない点、気分が悪くなった際には中断してもよいことを明記した。

3. 質問紙の構成

a. フェイスシート

対象者の性別・年齢・学年等を尋ねた。

b. 時間的展望の測定

白井(1994, 1997)の時間的展望体験尺度を用いた(Table1)。「目標指向性」(5項目)、「希望」(4項目)、「現在の充実感」(5項目)、「過去受容」(4項目)の4つの下位尺度、全18項目からなる。5件法で「あてはまる」(5点)「どちらかといえばあてはまる」(4点)「どちらでもない」(3点)「どちらかといえばあてはまらない」(2点)「あてはまらない」(1点)で回答を求めた。逆転項目は補正して得点を与えとし、得点が高いほど肯定的な時間的展望があることを示す。また、母子間の時間的展望の差異として、母親と子どもの各下位尺度得点の差の絶対値を用いることとした。

Table1. 白井(1994, 1997)の時間的展望体験尺度

下位尺度	質問項目
目標志向性	私にはだいたいの将来計画がある
	私には将来の目標がある
	私の将来は漠然としていてつかみどころがない*
	将来のためを考えて今から準備していることがある
	10年後、私はどうなっているのかよくわからない*
希望	私には未来がないような気がする*
	自分の将来は自分できりひらく自信がある
	私の将来には希望がもてる
	将来のことはあまり考えたくない*

現在の充実感	毎日の生活が充実している
	毎日が同じことのくり返しで退屈だ*
	今の生活に満足している
	毎日がなんとなく過ぎていく*
	今の自分は本当の自分ではないような気がする*
過去受容	過去ことはあまり思い出したくない*
	私の過去はつらいことばかりだった*
	私は過去の出来事にこだわっている*
	私は自分の過去を受け入れることができる

*逆転項目

Ⅲ. 結果

1. 基礎統計量

各下位尺度の項目の得点を合計し、それぞれの平均値を各下位尺度得点とした。また、過去・現在・未来を合わせた全体的な時間的展望の指標として、すべての尺度得点の合計値を項目数で割ったものを時間的展望得点体験尺度の総得点とした。中学生と母親の4つの下位尺度得点および、それらの合計点の平均について Table2 に示す。また、時間的展望体験尺度の各下位尺度の内的整合性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出したところ、「目標指向性」が $\alpha = .81$ 、「希望」が $\alpha = .72$ 、「現在の充実感」が $\alpha = .75$ 、「過去受容」が $\alpha = .70$ であり、十分な信頼性が確認された。

Table2. 中学生と母親の時間的展望体験尺度に関する基礎統計量

		最小値	平均値	最大値	標準偏差
中学生	目標志向性	1.000	3.302	5.000	1.096
	希望	1.500	3.500	5.000	0.960
	現在の充実感	1.800	3.537	5.000	0.846
	過去受容	1.500	3.738	5.000	0.939
	総得点	1.722	3.508	4.833	0.737
母親	目標志向性	1.400	3.415	5.000	0.825
	希望	2.000	3.604	5.000	0.779
	現在の充実感	2.000	3.741	5.000	0.792
	過去受容	1.500	3.780	5.000	0.879
	総得点	1.944	3.629	4.889	0.636

母子間の相違	目標志向性	0.000	0.922	2.800	0.710
	希望	0.000	0.884	2.250	0.545
	現在の充実感	0.000	0.878	2.400	0.560
	過去受容	0.000	0.860	2.000	0.589
	総得点	0.000	0.630	1.889	0.488

2. 母子間の時間的展望の差異と子どもの時間的展望の関連

次に、母子間の時間的展望の差異と子どもの時間的展望の関連を検討するために、時間的展望体験尺度の各下位尺度得点において、母子間の得点の差異と子どもの得点に関して相関分析を行った。その結果を Table3 に示す。

Table3. 母子間の時間的展望の差異と子どもの時間的展望の相関

		子どもの時間的展望				
		目標志向性	希望	現在の充実感	過去受容	総得点
母子間の時間的展望の差異	目標志向性	$r = -.447$ ($p = .003$)				
	希望	$r = -.284$ ($p = .072$)				
	現在の充実感	$r = .051$ ($p = .750$)				
	過去受容	$r = -.201$ ($p = .208$)				
	総得点	$r = -.230$ ($p = .149$)				

結果より、「目標指向性」得点における母子間の差と子ども自身の得点との間に中程度の有意な負の相関がみられた($p < .01$)。また、「希望」に関しても、有意傾向にとどまったが、弱い負の相関がみられた($p < .10$)。したがって、母子間の「目標指向性」の差異が小さいほど、子どもの「目標指向性」が高くなることがわかった。また、「希望」に関しても、母子間の差異が小さいほど、子どもの「希望」得点が高くなる傾向にあることが示唆された。一方で、「現在の充実感」「過去受容」「総得点」については、母子得点間の差異と子ども自身の得点との間に、有意な相関は見られなかった。

IV. 考察

本研究の目的は、中学生とその母親の時間的展望に着目し、過去・現在・未来に対する意識の母子間の関連を探索的に検討することであった。時間的展望の形成時期であるとされる青年期前期にあたる中学生と母親を対象に質問紙調査を実施し、その分析を行った。

1. 母子間の時間的展望の差異と子どもの時間的展望の関連

本研究の結果より、時間的展望のうち、「目標指向性」において、母子間の得点差が小さいほど、子どもの得点が高くなることが示唆された。また、「希望」についても同様の傾向が見受けられたが、結果はあくまでも 10%水準にとどまり、統計的に有意な相関があることは示されなかった。「目標指向性」は具体的な将来への見通しを持っているか、「希望」は将来をポジティブにとらえているかを示すものであり、どちらも未来展望に含まれる変数である。この結果を踏まえると、母子間で将来に対する志向性の程度が一致しているほど、子どもは将来に対するポジティブな意識が高くなると言えるだろう。

従来子どもが未来を展望し、将来の見通しを立てていく上で、親は重要なファクターになると考えられている。特に中高生においては、自身の将来を考えることに直結する進路選択にあたってのソーシャルサポートとして、親の役割の大きさについて強調されることも多い(成田・森田, 2015)。親からのサポートは子どもの自己効力を介し、進路決定などに間接的に影響する(Nota et al., 2007)といった報告もされているように、子どもが将来を考えていくには親の存在が大きく関わると言える。一方、そのような親からのサポートが十分実行されている場合でも、期待研究で見られているような親子間での意識のズレが生じていれば、サポートが効果的に行われず、かえって悪影響に繋がることも容易に考えられる。進路選択における親子間コミュニケーションに関する調査を行った高橋(2008; 2009)は、親子間で議論を避けないこと、親が青年に受容的、支持的であることが、青年のアイデンティティの感覚の高さと職業決定への積極的取り組みと関連すると述べている。高橋(2009)は同時に、親子間で意見の不一致があった場合でも、議論を避けて子ども自身が相互の意見を確認し調整することで、将来を前向きに考えることができることを指摘している。しかし、この調査は大学生を対象としたものであり、本研究の対象者である中学生と比較すると、アイデンティティの発達により進んだ状態にあると考えられる。したがって、親との意見の不一致という状況下においても、自分自身の意見を明確に持つことが可能であると考えられる。反対に、アイデンティティの形成が未熟な段階と考えられる中学生段階においては、親との意見が一致しない場合、自身の意見と親の意見の相互調整が難しい場合が多く、将来を考える作業に伴う葛藤が大きくなってしまいやすいことが推測される。以上を踏まえると、本研究の結果のように、母親と中学生の子どもの将来展望に対する意識の差異が小さい場合には、子どもが将来に対する相談を母親にも行いやすい状況にあり、将来を考える環境が整えられやすいことから将来への意識を持ちやすく

なることが推察される。

3. 本研究の限界と今後の展望

第一に、上述した通り、本研究の対象者はある特定の集団に属しており、サンプルとして偏りがあることを考慮すべきである。また、子どもは中学生のみを対象としたが、親子間の関係性は発達の段階によって変容するものであり、それに伴って時間的展望の形成に関わるような親の影響も徐々に変わっていくと考えられる。したがって対象を中学生に限らず、生涯発達の視点から、様々な年齢層に対象を広げていくことが求められる。第二に、今回は母子間の関連についてのみを検討したが、子どもの将来に対する意識の形成には父親の影響も大きく関わっていると考えられ、父親との関連についても今後は考慮することは必要不可欠だろう。第三に、本稿においては有意な相関がみられた将来に対する意識を中心に考察を進めたが、現在や過去に対する意識への親子間での関連についても、検討を重ねる必要がある。個々人の有している時間的展望は、過去・現在・未来がそれぞれ独立して存在しているものではなく、各次元が常に相互作用を及ぼしながら、現在の意識や行動が形成されるものである。したがって、現在や過去への意識に関しても吟味していくことで、時間的展望の形成に関する包括的な理解が促進されるだろう。また、時間的展望体験尺度で扱われている将来に関する質問は「私には将来の目標がある」「私の将来には希望がもてる」というような抽象的な項目から構成されているが、将来に対する意識の質的な側面をより詳細に検討していくことで、親子間の時間的展望の関連を精査していくことが可能となるだろう。

文献

- 赤星麗佳(2007). 親の期待が子供の自己効力感と孤独感に及ぼす影響 東亜臨床心理学研究, 6, 61-62.
- Blos, P. (1962). *On adolescence: a psychoanalytic interpretation*. New York : Free Press.
- Ericson, E.H. (1982). 自我同一性：アイデンティティとライフサイクル(小比木啓吾 訳編)(Erikson, Erik H.(1959)Identity and the life cycle: Selected papers. *Psychological Issues*, Vol 1, 1-171.)
- 勝俣暎史(1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要人文科学, 44, 307-318
- 成田絵吏・森田美弥子(2015). 高校生の進路選択における親のサポートについて—進路選択に関する自己効力と行動との関連から— キャリア教育研究, 33(2), 47-54
- Nota, L., Ferrari, L., Solberg, V. S., & Soresi, S.(2007). Career search self-efficacy, family support, andcareer indecision with italian youth. *Journal of Career Assessment*, 15, 181-193.

- Nurumi, J.E. (1991). How do adolescents see their future? A review of the development of future orientation and planning. *Developmental Review*, 11, 1-59.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers.
- (レヴィン, K. 猪股 佐登留(訳)(1979). 社会科学における場の理論(増補版)誠信書房)
- 大石郁美・岡本裕子(2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.
- 白井利明(1985). 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要教育科学 04 教育科学, 34(1), 61-70.
- 白井利明(1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65(1), 54-60.
- 白井利明(1997). 時間的展望の生涯発達心理学. 東京: 勁草書房.
- 白井利明 (2004). 時間的展望とアイデンティティにおける家族成員間の関連--青年期後期の子どもとその親である中年期夫婦を対象にして 大阪教育大学紀要 4 教育科学, 52(2), 241-251.
- 杉山成・神田信彦(1994). 中学生における一般的統制感と時間的展望の関連性 教育心理学研究, 42(4), 415-420.
- 杉山成(1995)時間次元における諸自己像の関連から見た時間的展望 心理学研究, 66(4), 283-287.
- 杉山成・神田信彦(1996). 青年期における一般的統制感と時間的展望:アパシー傾向との関連性 教育心理学研究, 44(4), 418-424.
- 高橋彩(2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究 16(2), 159-170
- 高橋彩(2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17(2), 208-219.
- 遠山孝司(1999). 親子関係がよいと小・中学生は親の期待にこたえようと思うのか? 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 46, 227-234.
- 遠山孝司(2006). 小・中学生の親子関係,親からの期待,子どもの目標の関係--親子関係がよい子どもは親の期待に応えようとするのか 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 53, 37-55.
- 都筑 学(2008). 小学校から中学校への学校移行と時間的展望——縦断的調査にもとづく検討—— ナカニシヤ出版.
- Wang, Li-fei. & Heppner, P. P.(2002). Assessing the impact of parental expectations and psychological distress on Taiwanese college students. *The counseling psychologist*, 30, 582-608.
- 渡辺弥生(1989). 児童期における公正観の発達と権威概念の発達との関係について 教育心理学研究, 37, 163-171.
- Zimbardo, P. G., Sword, S., & Sword, S.(2012). *The Time Cure: Overcoming PTSD with the New Psychology of Time Perspective Therapy*. New York: John Wiley & Sons Inc.